

特集

国際金融危機と ラテンアメリカ

特集にあたって

米国のサブプライムローン問題が原因で欧米金融市場にくすぶっていた金融危機の火種は、2008年9月に米国史上最大規模の負債を抱えてリーマン・ブラザーズが倒産したのを契機に、燎原の火のごとく一挙に世界に広がった。巨大金融機関の相次ぐ経営破綻、株価の暴落で世界経済は1929年恐慌以来といわれる未曾有の危機に直面している。ラテンアメリカはこの四半世紀だけでも、1982年対外債務危機、1994年メキシコ通貨危機、1999年ブラジル危機、2001年アルゼンチン危機と、幾度となく危機を経験してきた。しかし危機慣れしたラテンアメリカにとっても、今回の危機は過去に例をみない桁違いの規模である。米国とラテンアメリカは緊密な経済関係をもつ。米国発の国際金融危機はラテンアメリカの経済にどのような影響を及ぼしているのか。2009年3月時点までの状況を、域内先進4カ国のブラジル、アルゼンチン、メキシコ、チリについて探ってみた。

(星野 妙子)